

ば、Asは、これも同じCSに含まれるLsと並んで、他の真作とされる著作のどれよりもMKとの類似性や主題の共通性が見られる。⁽⁴⁾讃歌という文学形態とその哲学的内容からは、Asとは、MKに見られる空の思想を知識人以外の一般人向けにさらに分かりやすく簡潔なものにまとめ、讃歌という形で日常の宗教的実践の中で使用できるようにしたものではないかと推測される。たとえ上述の否定的要因などから、その著者がNāgārjunaではないと証明されたとしても、その目的がMKと同様の思想を伝えることにあったことには変わりはない。この場合には、後代の思想に通じた誰かが、Nāgārjunaに仮託してMKの思想をそれに忠実に巧みに著わしたが、用語の使用などでその思想背景を垣間見せてしまった、という可能性が考えられよう。

本稿はAsの著者問題に決着をつける事を目的とするのではなく、まずこの三性説に関する問題の解決を試みるものである。しかしこれによってAsの作者像がより鮮明になることを期待したい。手順としては、まず先行研究での議論を紹介し、ついでAs45の文脈上での読み及び注釈書の解釈を明らかにして、そしてそもそも三性説とはどういうものなのかを瑜伽行派の諸経論ごとに整理した上で、最後にAs45と三性説との関係を検討していく。

これまでの議論

それでは、今までの研究者たちはこの問題の部分をどのように解釈していたのだろうか。結論から言うとうと研究者によって様々に解釈されており、この部分をNāgārjunaの思想とは言えない三性説であるとしながらも問題の解決を保留するものを始め、いわゆる三性説そのものではなく彼の思想とは矛盾しないものであるとする説、さらにはNāgārjunaは三性説を知っていたので矛盾しないとするものである。しかし、この問題を特に取り上げて詳しく論じたものはなく、わずかにP. Williams氏によって文脈を考慮した中観的な解釈が提案されているにすぎない。⁽⁵⁾以下、そうした諸研究を概観してみることとする。

まず最初にこの問題に触れたのはR. Gnoli氏である。この時代には校訂サンスクリットとしてはG. Tucci氏によるNsとPsのものしかなく、氏はAsに関してにはチベット訳のみに用いている。氏はAsの著者に関して、MKと同じ形態(style)であることからNāgārjunaであると認めているが、その一方で、As45, 46には明らかに唯識派の思想が述べられており、かつその思想はNāgārjunaよりも後の時代のものであるとしている。また同時にNāgārjunaの生存年代にも疑問を投げかけている。⁽⁶⁾

Chr. Lindtner氏はさらに、As45cdがLanikāvātārasūtra(LAS) II-191abとほぼ一致することを指摘する。この問題を氏は、NāgārjunaがLASからこの部分を引用した、つまり彼は三性説をLASによってすでに知っていた、として矛盾はないとする。しかし中

Acintyastavaと三性説の関係について

津 田 明 雅

はじめに

1. 論点 / これまでの議論
2. Acintyastava 45の解釈 / 注釈書による解釈
3. 三性説とは
4. Acintyastava 45と三性説との関係

はじめに

Acintyastava(As)は中観派の祖であるNāgārjunaの作とされる仏陀への讃歌で、現在サンスクリットテキストとチベット訳が得られる。漢訳は存在しない。⁽¹⁾これはCatustava(CS)に含まれる四つの讃歌のうち第三番目の讃歌である。そのサンスクリットは全てCSとしての写本からそのうちの二讃歌(一章)として得られ、チベット訳は大蔵経からAs単独のものとして得られる。すでにそのサンスクリットとチベットの校訂テキストがChr. Lindtner氏によって出版されている。⁽²⁾その著者に関しては、いくつかのサンスクリット写本でもチベット大蔵経でもNāgārjuna作とされており、その諸編を引用するいくつかの文献でもそうされている。⁽³⁾また内容は大乘の立場から空の思想を説くという哲学的傾向の強いものであり、Nāgārjunaの諸著作の中でも特にMūlamadhyamakakārikā(MK)との類似が見られる。これらの点から、先行研究でもそのNāgārjuna作は否定されてこなかった。しかし未解決な最大の問題として、As45に三性説との関わりがみられるというものがある。本稿ではこの問題を解決すべく、As45の解釈を検討し、次いで三性説とは何かを実際の経論に即して確認した上で、最後にAs45と三性説との関係について仮説を立てたいと思う。

1. 論点

Asにはparatantra-という語が出てくる。この語はNāgārjunaの他の著作には見られず、しかもその語が用いられている偈頌のうちAs45は、唯識派の学説とされる三性説との何らかの関わりが伺える。Asにはこの他にも著者問題に関係する検証されるべき語として、'dharma-nairātmya'がある。しかしこうしたいいくつかの否定的要因にもかかわらず、この著作の中心的思想はMKのものと非常に近いものである。さらに言え

観派の祖とされる Nāgārjuna が唯識派のみ用いられるような思想を知っていたとするならば、それを直ちに認めることはできないだろう。三性説が唯識派あるいは瑜伽行派に固有の思想でないとするならば再考の余地はあるかもしれないが、その場合にも、LAS II-191 の周辺にはその他に五法など唯識派に特有とされる用語が見られ、少なくともこの部分が唯識派との関わりが深いことは否定できない。したがって、Nāgārjuna の時代に LAS の問題の個所が存在していたとは言えず、Lindtner 氏の説は受け入れられるものではない。⁽⁶⁾

また Chr. Lindtner (1982) への書評を書いた P. Williams 氏は、その中で As45 の解釈を検討して、Nāgārjuna の思想と矛盾しないものであることを主張する。⁽⁹⁾

これら以外にも CS の研究はあるが、われわれが問題としてしている個所に特に踏み込んだ議論がなされているものは見当たらない。⁽¹⁰⁾

2. As 45 の解釈

As45 はただその偈頌だけを見ればいわゆる三性説を表わしているように思えるが、恣意的な解釈を避けるためには、当然 As の文脈を考慮して作者の意図を明らかにしなければならぬ。結論から言うと、As45 はそれ以前の偈頌と密接な関係にあり、切り離して読むべきではない。具体的には As37~45 が一つのまとまりをなしていると言える。⁽¹¹⁾

以下に、As37~45 のサンスクリットおよびその和訳を挙げる。

bhāvabhāva-dvayātītam anātītam ca kutracit /

na ca jñānam na ca jñeyam na cāsti na ca nāsti yat // As37

〔それは〕存在、非存在の両者を超えたものであり、どこにおいても〔両者を超えないものであり、知識でもなく、知識の対象でもなく、あるものでもなく、ないものでもない〕。

yan na cākam na cānekam nōbhayam na ca nōbhayam /

anālayam athāvyaktam acintyam anidarśanam // As38

〔それは〕一でもなく、多でもなく、その両者でもなく、そして両者でないことでもない。また拠り所もなく、顕現するものでもなく、思慮の及ばないものであり、比類ないものである。⁽¹²⁾

yan nōdeti na ca vyeti nōchedi na ca śāsavatam /

tad ākāṣa-pratīkāśam nāksara-jñāna-gocaram // As39

〔それは〕生じず、滅びず、断滅したものでもなく、恒常なるものでもない。〔そうした〕それは虚空のようなもので、文字や知識の領域にあるものではない。

yaḥ pratītya-samutpādaḥ śūnyatā sāva te matā /

tathā-vidhāś ca sad-dharmas tat-samās ca tathāgataḥ // As40

縁起すること、それは空性に他ならない、とあなたはお考えになった。そして正しい教えも同じであり、また如來もそれと同一である。⁽¹³⁾

tat tattvam paramārtho 'pi tathatā dravyam isyate /

bhūtam tad avisamvādi tad-bodhād buddha ucyate // As41

〔以上のような〕それは真実であり、最高の意味(真実)でもあり、真如であり実在であると考えられている。それは如実であり、欺かないもので、それを悟っているから仏陀と言われているのである。

buddhānām sattva-dhātoś ca tenābhimatvam arhataḥ /

ātmanas ca pareṣām ca samatā tena te matā // As42

それゆえ、諸仏と、命あるものの領域とは、意味的には違いはない。それゆえ自己と諸々の他者とは等しいと、あなたはお考えになった。

bhāvebhyah śūnyatā nānyā na ca bhāvo 'sti tāṃ vinā /

tasmāt pratītya-jā bhāvās tvayā śūnyāḥ prakāśitāḥ // As43

空性は諸々の存在とは別なものではないし、それ(空性)なしでは存在はない。それゆえ〔他に〕縁って生じる諸存在は空である、とあなたはお説きになった。

hetu-pratyaya-sambhūtā paratantrā ca samvrtīḥ /

paratantra iti proktaḥ paramārthas tv akrtrimah // As44

世俗的なものは原因と条件から生じたもので、他に依存したものである。「他に依存した〔存在〕と〔世間では〕言われるが、それに対して最高の意味(真実)は人間的なものではない。

svabhāvaḥ prakṛtiḥ tattvam dravyam vastu sad ity api /

nāsti vai kalpito bhāvaḥ paratantras tu vidyate // As45

本体、本性、真実、実在、事物、存在とも〔世間では言われる〕。実に、構想された存在は存在しないが、しかし〔世間では〕他に依存したものとして知られる。

As37d, 38a, 39a に見られる yat は As39c や 41a の tat に係っており、それらは As40 や 43 に説かれるような、空性や最高の真実といったものを示していると思われる。それに対して As44, 45 では世俗的なものが説かれ、また最高の真実との対比もなされる。つまりこれら一連の偈頌は二諦の観点からの記述と考えるとよいだろう。そして最高の真実は縁起(pratītya-samutpādaḥ)という語をもって説明がなされ、世俗的なものは依他(paratantra-)という語をもって説明がなされている。As45d の解釈としては「他に依存した〔もの(bhāva)〕は存在する。」というよりはむしろ「〔もの(bhāva)〕他に依存したものと知られる。」と読みたいところである。

しかし勝義諦の点から説かれた「縁起」も世俗諦の点から説かれた「依他」も異なったものではない。それに通じる考えは As42 にも説かれている。われわれはまさにそこに

に空性の醍醐味を見出すことができよう。つまりAs45のparatantraは、As44でsamvrtiの形容詞とされているparatantraと同じ価値をもって世俗的なものあり方を指摘していると同時に、意味的には最高の真実のあり方として説かれたpratiya-samutpādaと同一のものである。したがって、清浄と雑染の問題に関しては、ことばとしては「依他」が汚れて「縁起」が清浄に属するものとされてはいるが、究極的には両者はむしろ清浄と雑染のいづれにも属さない中立的、中道のものだと考えるべきだろう。

注釈書による解釈

Asでparatantraの見られる箇所は注釈書ではどう読まれているのか。ここではCSの注釈書のうちAkāśīkāの読みを見ていきたい。この注釈書はサンスクリット写本が一本しか存在せず、その奥書からは注釈者はSiromaniとされ、1492年か1573年に筆写されたものと考えられる。注釈内容は大半は偈頌の語句を忠実に別の言葉に置き換えたものや文法的説明で占められており、明らかに読み間違いがいくつも見当たったものの、全体を通してテキストに忠実な読みがなされている。それらの中にはこれまでの研究には見られなかった解釈もあり、われわれを裨益すること大である。

paratantraの見られる箇所はAs16, 44, 45であり、以下ではそれらに対応する注釈書の箇所を挙げる。和訳は本執筆のもの、偈頌部分の翻訳は注釈者の読みに沿ったものである。

na svabhāvo 'sti bhāvānām parabhāvo 'sti no yadā /

bhāva-graha-grahāveśah paratantra 'sti kas tadā // (As16) //

他の存在(他体)がない時、諸存在の自体はない。そのとき、他に依存した、存在の把握への執着にとらわれた(もの(svabhāva))が、どうして存在しようか。

kartṛ-matam nirākartum anena (21a6) ślokenāha // nāsti / kaḥ svabhāva
ātma-sattvam / keśam bhāvānām prthivy-ādī-rupānām / nāsti / kaḥ pa-(21a7)
rabhāvah / keśam bhāvānām pūrvōktānām / kadā yadā / svasyābhāvāt para-
syāpy abhāva iti hetoḥ / asti / ko bhāva-graha-(21a8) grahāveśah / kaḥ kaḥ /
viparyāsa-dṛṣṭyā asati bhāve bhāva-graho ghaṭa-pañādi-pādārtha-grahanam
sthānu puruṣa-vibhrama-va-(21a9)t / evam viśiṣṭe bhāva-grahe grahāveśo
rāga-samsaktiḥ / kim viśiṣṭo bhāva-grahah paratantraḥ pareṇa hetu-pratiya-
yena viparyā-(21b)sa-buddhi-vyavasthitena tantryate utpādyate yaḥ saḥ
tathā / kadā tadā // 16 //

行為者という考えを取り除くために、この偈頌によって述べる。「存在しない」。何がかとしようとして「自体は」つまり、自己の存在性は。何のかわかると「諸存在の」つま

り、地などの物質の。「存在しない」。何がかとしようとして「他の存在(他体)が」。何のかわかると、前に述べられた「諸存在の」。いつかということ、そういう時。自らが存在しないから、他もまた存在しない、という理由から。「存在する」。何がかとしようとして「存在の把握への執着にとらわれた(もの)が」。何としてかということと「どういうものとして」。誤った見解によって存在が非存在であるのに「存在の把握」がある。つまり壺や衣服などの対象の把握がある。枕に対して、人だ、と間違えるように。このように特徴づけられる、存在の把握において「執着に、とらわれた」つまり、貪りと結びついた。「存在の把握」はどのように特徴づけられるかということと「他に依存した」つまり、他によって、つまり原因と条件によって、誤った知覚に基づくこととによって、規定される、つまり生み出される。そのようなものが、以上のように述べられている。いつかということ「そのとき」。

ここでのparatantraは、もの(bhāva)が自立したのか他に依存したのかかという問題に関して用いられており、三性説とは関係なく、単にsvatantraに對立するものとして述べられているにすぎない。そして注釈よると「他に依存した(paratantra)」とは「原因と条件によって生み出される(hetu-pratyayena utpādyate)」ということ、つまり縁起を指していることとされる。

hetu-pratyaya-sambhūtā paratantrā ca samvrtiḥ /

paratantra iti proktaḥ paramārthas tv akrīmah // (As44) //

世俗的なものは原因と条件から生じたもので、他に依存したものである。他に依存した(もの)は以上のように述べられる。しかし最高の意味は人為的なものではない。

asti / kā samvrtiḥ (28b4) samsārātā / kim viśiṣṭā paratantrā / punaḥ kim viśiṣṭā hetu-pratyaya-sambhūtā / hetuḥ kāraṇam avi-(28b5)dyādīḥ pratyayah samskāra-jāty-ādīḥ tābhyām sambhūtā jātā yā sā tathēti / asti / kaḥ paratantra-(28b6)ḥ pareṇa hetu-pratyayena tantryate utpādyate yaḥ sa tathā / kim viśiṣṭah proktaḥ / katham iti / (28b7) bhavati / kaḥ paramārthah / paramo 'viparito yathā-bhūto yo 'rthaḥ sa paramārthah / kim viśiṣṭo 'krīmah sarva-(28b8)samkalpa-kriyā-kāra-rahitaḥ / katham tu // 44 //

「存在する」。何がかとしようとして「世俗的なものは」。つまり、輪廻するものは。どのようにつまづかされるかということと「他に依存したものととして」。さらにどのようにつまづかされるかということと「原因と条件から生じたものとして」。「hetu」とは原因であって無明などであり、「条件」とは形成作用(行)(ないし)生などであり、その両者から「生じた」つまり、生まれた、それが、以上のようなものである、と[述べられている]。「存在する」。何がかとしようとして「他に依存したものは」。つまり、他のものによっ

て、つまり原因と条件によって、規定される、つまり生み出される、そうしたそれが以上のように「述べられている」。どのように特徴づけられるかというところ「述べられて」。どのようにかというところ「以上のように」。「存在する」。何がかというところ「最高の意味は」つまり、最高で誤りのない、ありのままの状態であるところの意味、それが「最高の意味」である。どのように特徴づけられるかというところ「人為的でないもの」として、つまり、あらゆる構想や行為や行為者から離れたものとして。どのようにかというところ「しかし」。

svabhāvah prakṛtis tattvam dravyam vastu sad ity api /
 nāsti vaikalpito (28b9) bhāvah paratantras tu vidyate // (As45) //
 「本体、要素、真実、実在、事物が、存在している」とも（言われるような）構想された存在は存在しない。しかし他に依存した【もの】は存在する。
 nāsti / ko bhāvah padārthah / kim viśiṣṭo vaikalpitaḥ / vikalpita vastuni jāto
 (29a1) vaikalpitaḥ / sthānu puruṣa-vibhrama-vat / katham iti / ititi kim / as-
 ti / kaḥ svabhāva ātma-sattvam / asti / kā (29a2) prakṛtiḥ pṛthivy-ādīḥ / as-
 ti / kim tattvam pramāṇam / asti / kim dravyam sat svarūpam / asti / kim
 vastu ghatādīḥ / kim viśiṣṭam (29a3) sat / katham api / vidyate tiṣṭhati / kaḥ
 paratantraḥ sarvaḥ kalpito dharmah / katham tu // 45 //

「存在しない」。何がかというところ「存在は」つまり、対象は。どのように特徴づけられるかというところ「構想された」。構想された事物に対して生じた、というのが「構想された」である。私に対して、人だ、と間違えるように。どのようにかというところ「本体」のように。「iti」というのは何かというところ、「存在する」。何がかというところ「本体」つまり、自己の存在性。「存在する」。何がかというところ「要素が」つまり、地など【の5要素】が。「存在する」。何がかというところ「真実が」つまり、正しい認識手段が。「存在する」。何がかというところ「実在が」つまり、存在するそれ自身の形が。「存在する」。何がかというところ「事物が」つまり、重などが。どのように特徴づけられるかというところ「存在しつつある」。どのようにかというところ「また」。「存在する」つまり、ある。何がかというところ「他に依存した【もの】が」つまり、あらゆる構想された現象(法)が。どのようにかというところ「しかし」。

As44の注釈では、paratantraはAs16の注釈の場合と同様に縁起を指すものとされている。またAs45の注釈では、この個全体を通して世俗的なものが説かれていると解釈されており、45abの諸々の語は45cの「構想されたもの」に含められている。しかしそうした構想作用の対象である外界の事物(vastu)は、実体としては存在しないが「他に依存した」ものとして存在している、というのが45cdでの注釈者の解釈であろう。しかし結局、As44, 45ではparatantraに関して深く立ち入った解釈はなされておら

ず、Asの作者の真意はこの注釈からはうまくつかめない。

以上見てきたようにAs45は三性が説かれたものではなく二諦の観点からの記述だと解釈することが可能である。しかしそこから直ちにAs45をNāgārjunaのものであるとするにはためらいを感じる。確かにAs45には三性説が明確に説かれているとは言えないが、三性の説かれるLASIにパレル部分があるなど、As45がまったく三性説と関わらない、とは言いきれないからである。

3. 三性説とは

As45がはたしていわゆる三性説であるのかどうか、その判断を下す前にまず、三性説とは何かを押さえておかなければならない。また「As45は三性説と関連する」とする先行研究でも、それがどの段階の三性説にあたるかは検証されておらず、今回のような検討は避けては通れないものだと思う。三性説の研究に関しては先学の優れた研究が多くあるが、細部では研究者の間で意見の一致しない部分もあり、さらにテキストに即した精密な検討が必要であると思われる。本稿では三性あるいはそれに相当する概念が諸経論で具体的にどのようことを用いて表わされているのかを中心に押さえていきたいが、このような作業に簡便なように、先行研究によりついても今回新たに諸経論ごとにまとめ直した。本執筆者の理解の不充分な点に関しては識者のご批評を切に請いたい。

三性説とは遍計所執性(parikalpita-svabhāva, (遍)と略)、依他起性(paratantra-svabhāva, (依)と略)、円成実性(pariniṣpanna-svabhāva, (円)と略)の三つからなるものである。三性の用語に関しては、三つそれぞれの後分 svabhāva の代わりに lakṣaṇa が用いられることもあり、いずれの場合も複合語の種類としては所有複合語(Bahuvrīhi)である。つまりこれらの語は形容詞であって、それらが何を形容しているかが問題となる。さらに、その形容される「何か」が存在するか否かにも注意しなければならない。結論を先取りすれば、その「何か」は経論によって「外界の対象」か「知識にすぎないもの」かに二分される。

これまでの研究では、三性説の起源について、『般若経』『阿含経』『十地経』などに三性のうち個々のものに相当すると思われる語句が見られることが指摘されているが、それらは三性を三者の総合的な関係として捉えたものではないと言っている。三性が具体的かつ体系的にまとめられて説かれるのは瑜伽行派の経論で、『解深密経』や『瑜伽師地論』あたりからである。ここでは以下の九経論、瑜伽師地論本論地持論、『解深密経』、『瑜伽師地論抉決分』、『大乘莊嚴經論』、『中辺分別論』、『攝大乘論』、『唯識三十頌』、『三性論偈』およびLASIにみられる三性説をまとめ、それらをAsの記述と比較してみた。これらの諸経論の成立順は未だ確定されたものではないが、ここでは仮に、LASを

除いて、先行研究を踏まえながら三性説の思想的な発展を考慮して並べてみた。

Bodhisattvabhūmi of the *Maulībhūmi* of the *Yogācārabhūmi* (*Bb̄h*)⁽¹⁰⁾

ここでは具体的に三性を指す用語は見られないが、三性それぞれに相当すると思われる概念が説かれているので、以下に三性の分類にあてはめて挙げる。

(遍) ことばによる設定 (prajñapti: U. Wogihara (1971) p.46.1)

人という、ことばによる設定 (pudgala-prajñapti: p.46.3)

ことばによる設定や言語の適用 (prajñapti-vādōpacārah: p.46.5)

ことばによる設定や言語を自体とする現象(法) (prajñapti-vādātmake dharmah: p.47.21)

(依) 単なる事物 (vastu-mātram: p.45.25, p.46.4~5)

色形などの(身体)構成要素 (rūpādayah skandhāh: p.46.2~3)

ことばによる設定の(依り所となる)事物 (prajñapter vastu: p.46.6~7)

余るもの (avaśiṣṭam: p.47.18)

ことばによる設定や言語の依り所 (prajñapti-vādāśrayah: p.47.25)

(円) 真如 (tathatā: p.48.4~5)

真実 (tattvam: p.46.1)

言語表現されることを離れた本体を持つもの (nirabhilāpya-svabhāvatā: p.48.5)

如実な (yathā-bhūtā: p.48.4)

また、遍計所執性に対応する「ことばによる設定や言語を自体とする現象(法)」は「存在しない(nāsti: p.47.21)」、依他起性に対応した「余るもの」は「存在する(sat: p.47.18)」と説かれている⁽²⁰⁾。また遍計所執性に当たるものは、言語とのかかわりが深いものと捉えられている。

ただ、「色形などと名づけられる諸現象(諸法)」には、言語表現されることを離れた対象として存在しているものがあり、それこそが、最高の意味としては本性としての法性であると知られるべきである。(yā rūpādi-samjñakānām dharmānām nirabhilāpyenārthena vidyamānatā saśā paramārthataḥ svabhāva-dharmatā veditavyā: p.48.20~22)とあるように、「言語表現されることを離れた対象として存在しているもの」がそのまま「本性としての法性」であるとされており、依他起性と円成実性の区別⁽²¹⁾があいまいな箇所もある。

ここに説かれているものをAsと比較するとき、両者は概念としては一致しているが、それ以外での共通点は少ない。まず用語の一致が見られない。つまりAsでは三性説と共通の用語として kalpita, paratantra が見られるのに対し、Bb̄hにはそうしたものがなく、また説き方の違いもあり、Asでは一般的な存在論の立場から説かれるのに対し、

Bb̄hでは prajñapti や nirabhilāpya が用いられるなど、言語との関わりが特に強調される。したがって、両者には直接的な影響関係はないのではないかと思われる。

Samdhinirmocanasūtra (SNŚ)⁽²²⁾

ここでは三性を示す語が見られ、その三者の関係が明確に説かれ、三者ごとの説明も詳しくなされている。その三性は tri-svabhāva ではなく [tri]-lakṣaṇa (mtshan ñid [gsum po]: VI-3)とされている。また、三無自性性も説かれているが、ここでは [tri]-niḥsvabhāvatā (mtshan ñid no bo ñid med pa ñid [gsum po]: VII-3)で svabhāva と いう語が用いられている。

(遍) 諸現象(諸法)の本体あるいは違いとして名と言語契約によって設定されていること (chos rnams kyi ño bo ñid dan bye brag tu miñ dan brdar rnam par bžag pa: VI-4)

形相と結合した名に依って知られる (mtshan ma dan 'brel ba'i miñ la brten rab tu śes so: VI-10)

対象に毛髮状の影が(実際に)あると誤って思うこと(趣意) (rab rib kyi skyon: VI-7)

水晶がある色と重なった時、水晶をその色をした宝石だと誤って把握すること(趣意) (log par 'dzin pa: VI-8, 9)

(依) 諸現象(諸法)が縁起すること (chos rnams kyi rten cin 'brel par 'byun ba ñid: VI-5)

依他起の特徴に対して遍計所執の特徴だと執着することに依って知られる (gžan gyi dbaṅ gi mtshan ñid la kun brtags pa'i mtshan ñid du mñon par žen pa la brten rab tu śes so: VI-10)

対象に毛髮状の影があること(趣意) (rab rib kyi mtshan ma snañ bar gyur pa: VI-7)

非常に透明な水晶(そのもの) (śel śin tu gsal ba: VI-8, 9)

清浄な対象ではない (rnam par dag pa'i dmigs pa ma yin pa: VII-6)

(円) 諸現象がそのままにあること(諸法の真如) (chos rnams kyi de bžin ñid: VI-6)

依他起の特徴に対して遍計所執の特徴だと執着することがないことに依って知られる (gžan gyi dbaṅ gi mtshan ñid la kun brtags pa'i mtshan ñid du mñon par žen pa med pa la brten rab tu śes so: VI-10)

毛髮状の影が消えた本来の対象の姿(眼における毛髮状の影という誤りの顕現を離れた) (mig la rab rib kyi skyon chags pa dan bral bar gyur pa: VI-7)

ある色と重なった水晶に、その色をした宝石の特徴は常に永遠に成立せず本体のな

いものであること(趣意) (mtshan ñid der rtag pa rtag pa'i dus dan ñid ther zug ther zug gi dus su mā grub cin ño bo ñid med pa ñid: VI-9)
 法無我、真如、清浄な対象(chos bdag ma mchis pa, de bzin ñid, rnam par dag pa'i dmigs pa: VII-25)

(相無自性性)名や言語契約として設定された特徴であるけれど固有の特徴によって存続してはいない(miñ ñan brdar rnam par bzag pa'i mtshan ñid yin gyi ran gi mtshan ñid kysis rnam par gnas pa ni ma yin pa: VII-4)
 (生無自性性)他の縁の力によって生じてはいるが自体によるものではない(rkyen gzan gyi stobs kysis byuñ ba yin gyi bdag ñid kysis ni ma yin pa: VII-5)
 (勝義無自性性)縁起する現象(法)であり、生無自性性によって本体のないもの(rten cin 'brel par 'byuñ ba'i chos gan dag skye ba ño bo ñid med pa ñid kysis ño bo ñid med pa de dag: VII-6)

あらゆる現象(一切法)の無自性性によって明らかにされる(chos thams cad kyi ño bo ñid med pa ñid kysis rab tu phyee ba yin pa: VII-6)
 この三無自性性は上の三つの特徴(三相)と密接に関連していることが分かる。つまり三無自性性では三つの特徴(lakṣaṇa)がそれぞれの方に方において本体(svabhāva)を持たないものであることが説かれている。tri-lakṣaṇaに代えて、以後の経論で三性を tri-svabhāvaと呼ぶようになるのはここを発端としているのではないかと思われる。

ここで説かれる三性の概念はAsのものと非常に近い。三性の用語が何らかの実体を表わす svabhāvaではなくそのものの特質を示す lakṣaṇa で表わされていることから、いっそう両者の親近性が感じられる。Asでは paratantra や kalpita は bhāvaつまり外界の対象あるいは現象世界の、その特徴を示す形容詞として使われていたにすぎず、その特徴自体に何らかの実体を見ようとするものではなかった。またSNSで依他起性は「清浄な対象ではない」、円成実性が「清浄な対象である」と言われていること、Asで paratantraが世俗的なものとされていることに近いと言えよう。両者の違いは、SNSでは三性が体系的に確立されていてAsよりも三性それぞれの独立性と三性相互の関連性が明確になっている点である。その意味では、SNSの三性説はAsに説かれていることよりも発展したものと考えられる。

Viniścayasamgrahani of the Yogācārabhūmi (VinSg)⁽²⁴⁾

ここではSNSと違って三者が tri-svabhāva(ño bo ñid gsum: P '119b7)とされている。(暹)名と言語契約から生じる本体(miñ ñan brda las byuñ ba'i ño bo ñid: '119b8)

名のみ(miñ tsam: '127b4)

(依)縁起する本体(rten cin 'brel par 'byuñ ba'i ño bo ñid: '120a1)

言語表現される有為の事物がすべて集められたもの(brjod par bya pa 'dus byas kyi ños po thams cad bsdus pa: '127b8)

言語表現される事物のすべて(brjod par bya ba'i ños po thams cad: '127b8)

(円)諸現象がそのままにあること(諸法の真如)(chos rnams kyi de bzin ñid: '120a2)

聖者の知識の領域('phags pa'i ye šes kyi spyod yul: '120a2)

聖者の知識の対象('phags pa'i ye šes kyi yul: '120a2~3, D om.)

聖者の知識の縁り所('phags pa'i ye šes kyi dmigs pa: '120a3)

実在の極限(yaṅ dag pa'i mtha': '128b5)

知られるべき法界(chos kyi dbyiñs šes par bya ba: '128b5~6)

また、三無自性性が三性と同等なものとして説かれている。すなわち、

(相無自性性)諸現象(諸法)の、言語習慣から生じるという本性(chos rnams kyi tha sñad las byuñ ba'i ño bo ñid: '118a2)

(生無自性性)諸々の形成作用は縁起するものであるから縁の力によって生じるもの、自らは生じないこと('du byed rnams ni rten cin 'brel par 'byuñ ba yin pa'i phyir

rkyen gyi stobs kysis skye ba yin gyi ran mi skye ba: '118a2)

(勝義無自性性)真実の意味として特徴を離れている現象(法)(de kho na'i don gyis mtshan ñid ñan bral ba'i chos: '118a3)

こうした記述はSNSの三無自性性とはほぼ一致する。

また五法と関連した記述も見られる(P '124a8~b2)。五法(chos lha po dag)は因相(gyu mtshan)、名(miñ)、分別(rnam par rtog pa)、正智(yaṅ dag pa'i šes pa)が依他起性に、残りの一つ(gong)、つまり真如が円成実性に配当され、遍計所執性に当たるものはないとされる。この分類はこの論書に特徴的なものといえる。⁽²⁶⁾

三性における雑染と清浄の区別がはつきりと述べられている箇所はないが、依他起性に関しては雑染の側面と同時に、清浄の側面を認める記述の見られる箇所がある。⁽²⁷⁾

VinSgにおける三性説はSNSのものと比較したとき、三性に svabhāva という語を用いていること、また五法と関連した記述が見られること、依他起性に雑染だけでなく清浄の側面をも認めていること、の三点が新たに加わっていると言える。一般に VinSgは SNSを受けて著わされたものとされるが、この三性説に關しても同様のことが言える。 VinSgでは上に挙げたような新たな点はあるけれど、基本的にはSNSの三性説に忠実なものであるからである。

したがって、三性に關する基本的な概念としてはAsと依然、通底していると言える。

Mahāyānasūtrālamkāra (MSA)⁽²⁸⁾

ここではSNSと同様に三性は [tri]-lakṣaṇa(XI-38, 39, 40)とされているが、それは現

象世界のあり方を形容詞的に表わす傾向のあったSNSとは違って、*VinSg*に見られるような何らかの形をもった *svabhāva* に近いものが言われていると思われる。それは *VinSg* のものほど明確に示されていないものの、概念としては *tri-svabhāva* に対応していると言える。三性説に関する部分に限って言えば、この *MSA* では、形式としては *SNS* を踏まえつつも内容は *VinSg* でさらに進展したものを引き継いでいるのではないだろうか。

(通) 言語に対応する対象が名によって切り出されたものの像 (yathā-jalpārtha-sam-

jñāyā nimittam: XI-38a)

その(上述の像の)潜在印象(tasya vāsanā: XI-38b)

それ(上述の像)からの対象の顕現(tasmād artha-vikhyānam: XI-38c)

名に対応する対象の、対象に対応する名の〔それぞれ〕顕現(yathā-nāmārtham

arthasya nāmnah prakhyānatā: XI-39ab)

幻において作られたもの(māyā-kṛtam: XI-15c)

その物(幻)の像の実体(tad-bhāvah: XI-19b)

(依)三種を顕現としてもつ、つまり「把握されるもの」[「把握するもの」]を特徴として持つ虚妄分別(tri-vidha-tri-vidhābhāso grāhya-grāhaka-lakṣaṇo 'bhūta-parikalpaḥ: XI-40abc)

幻(māyā: XI-15a)

その形象(幻)の像が知識の中に映し出されたもの(tad-ākṛti: XI-19a)

(円)無であり有であること(abhāva-bhāvata: XI-41a)

有と無が平等であること(bhāvābhāva-samānatā: XI-41b)

寂滅でなく寂滅であること(asānta-sāntā: XI-41c)

構想作用のないこと(akalpā: XI-41c)

そこにその物はないこと(幻)において幻の像の実体はないこと(tasmin na tad-bhāvah: XI-16ab)

幻などにおいて存在非存在の区別がなされないこと(bhāvābhāvāviśeṣasā ca māyāḍiṣu vidhivāte: XI-20cd)

ここで特筆すべきことは依他起性が虚妄分別とされていることである。つまり、これまで外界の対象そのものを指していた依他起性がここでは知識の中に取り込まれた対象を指しているのである。それはすなわち三性すべてが知識の中に取り込まれることを意味する。これは三性説と唯識説の融合と言え、ここにきて三性説は大きな転換点を迎えたと言える。

ここでの三性説の特徴は遍計所執性を対象の顕現と名の顕現、つまり所取と能取に分けていることと、依他起性をも三種と三種を持つもの、つまり所取と能取を持つものと

していることである。これら両者の所取・能取は厳密には同じものではなく、前者はすでに把握された客体とすでに把握した主体、後者は把握されるべき客体と把握すべき主体である。いわば前者はすでに知識の中から切り出された顕現、後者は知識の中のものから切り出される可能性を有した顕現である。⁽³⁰⁾

ここではもはや三性説はAsのものは異質なものとなっている。

⁽³¹⁾
Madhyāntavibhāga (MAV)

ここでは三性に相当する語は「三種の本体(svabhāvas trividhah: III-3)」である。また、I-5ab: *kalpitah paratantrās ca pariniṣpanna eva ca /* でのように、*svabhāva* などで用いられている。

(遍)二つ(dvayam: I-1b)

対象(arthah: I-5c)

いかなるときにも存在しない(asad nityam: III-3ab)

(依)虚妄分別(abhūta-parikalpaḥ: I-1a, 5c)

三界に属する「心」と「心に属するもの」(citta-caittās tri-dhātukāḥ: I-8b)

存在するが真実としてではない(sad apy atattvataḥ: III-3b)

(円)空性(sūnyatā: I-1c)

二つのものの非存在(dvayābhāvah: I-5d)

真実として存在しなかった存在しない(sad-asat tattvataḥ: III-3c)

MAV は唯識思想を説くものであるが、中観思想との関わりも深い。冒頭のI-1, 2では空性が虚妄分別との関わりの中で説明され、I-12~22ではさらに空性に関する記述が続く。III-10~12では依他起性の位置付けが明確ではないけれど、三性と二諦との関係が説かれる。

そのほかIII-13では三性と五法との関係が述べられる。ここでは遍計所執性と依他起性に因相と分別と名が含まれ、円成美性に正智と真如が含まれることが説かれる。しかしその際、三性の名は具体的に挙げられておらず、三性が五法と関係することは、なんらかの経論を前提として述べられている観がある。こうした三性に関する暗黙の了解のようなものは、この論書の冒頭でいきなり「虚妄分別」という語が依他起性に代わって用いられていることから伺えよう。つまり、あえて経論名を挙げるならば、*VinSg* に見られた三性と五法との関係、*MSA* に見られた依他起性が虚妄分別であることを *MAV* は引き継いでいるのではないかと推測される。また、*MSA* で「三種三種の顕現」とされていたものがここでは「心と心に属するもの」と、さらに明確にされている。

したがって、*MAV* と *As* との関係については、*MSA* の場合と同様に *MAV* でも三性が知識の中に取り込まれているという点では、両者の思想は同一とは言えない。ただし、

MAVで三性が空性や二諦説といった中観思想との関わりで説かれていること、また三性の記述の直後に「増益」と「損減」の記述があることはAsと類似している。

⁽³⁴⁾
Mahāyānasamgraha (MS)

ここでは三性は [tri]-laksana (mtshan ñid [gsum po]: II-1) と [tri]-svabhāva (ño bo ñid [gsum po]: II-15) と呼ばれる。そして三性を挙げる際にまず依他起性を挙げるのがこの論書の特徴である。

(遍) [外界の] 対象は存在しないけれど知識に過ぎないそれが対象として顕現すること

(don med kyañ rnam par rig pa tsam de don ñid du snañ ba: II-3)

それ(依他起性)を依り所としている非存在の対象が「まさに対象として」顕現している (de la gnas pa'i don med pa [don ñid du] snañ ba: II-15)

自己の特徴がないものに対して分別しているにすぎない (ran gi mtshan ñid med la kun tu rtog pa tsam: II-15)

分別したもの、分別されたもの (kun tu rtog pa, kun tu brtags par bya ba: II-16)

無限にある (対象の) 形を分別したものの (rnam pa mtha' yas pa'i rnam par rtog pa dag: II-16)

ある (対象の) 形が (実体をもつものとして) 分別されたところのもの (rnam pa gañ du kun tu brtags pa de: II-16)

名によって対象 (を分別すること) (min gis dmigs pa: II-16)

本体として分別すること (ño bo ñid du kun tu rtog pa: II-18)

特殊性として分別すること (khyad par du kun tu rtog pa: II-18)

分別されたという特徴をもつ (kun brtags pa'i mtshan ñid: II-32)

(依) アーヤ識の種子をもち虚妄分別に包摂されている知識 (kun gzi rnam par ses pa'i sa bon can yañ dag pa ma yin pa kun rtog pas bsduś pa'i rnam par rig pa: II-2) 実在ではなく迷乱に過ぎないものが対象として顕現することの依り所 (yod pa ma yin pa dañ nor ba'i don snañ ba'i gnas: II-2)

知識にすぎないもので対象が顕現する依り所 (rnam par rig pa tsam don snañ ba'i gnas: II-15)

自らの潜在印象の種子から生じることから、それゆえ原因という他のものに依っている (ran gi bag chags kyi sa bon las skyes pa yin pas de lta bas na rkyen gyi gzan dbaṅ: II-15)

生じた後には一瞬間より長くは自己がとどまることができない (skyes nas kyañ skad cig las lhag par bdag ñid gnas par mi nus pa: II-15)

意識 (yid kyi rnam par ses pa: II-16)

潜在印象の種子であるところの他のものに依っていること (bag chags kyi sa bon gyi gzan gyi dbaṅ: II-18)

汚れと清らかさが本体として完全に成立せず、他に依っていること (kun nas ñon moṅs pa dañ rnam par byaṅ ba'i ño bo ñid yoñs su [ma] grub pa gzan gyi dbaṅ : II-18)

依り所という特徴をもつ (gnas kyi mtshan ñid: II-32)

(円) 依他起性そのものにおいてその対象の特徴が完全に存在しないこと (gzan gyi dbaṅ gi mtshan ñid de ñid la don gyi mtshan ñid de gtan med pa ñid: II-4)

それ(遍計所執性)が決して存在しないという特徴をもつ (de gtan med pa'i mtshan ñid: II-15)

他のものにならない (gzan du mi'gyur ba: II-15)

清浄な対象 (rnam par dag pa'i dmigs pa: II-15)

あらゆる善の現象(法)のうちで最高のもの (dge ba'i chos thams cad kyi mchog: II-15)

本体として完全に成立している (ran bzin gyis yoñs su grub pa: II-18)

清らかで完全に成立していること (rnam par dag pa yoñs su grub pa ñid: II-18)

法性という特徴をもつ (chos ñid kyi mtshan ñid: II-32)

このほかにも II-16 で遍計所執性のあり方が詳しく分析されているほか、II-19 では遍計所執性が四種、五種に分類されること、II-20 では依他起性(vikalpa)として表現されているが十種に分類されること、II-26 において遍計所執性は非存在、依他起性は幻などのようなもの、依他起性は四種あることが述べられる。また II-27 では依他起性に八種あることが述べられるが、その二番目に「心と心に属するもの (sems dañ sems las byun ba)」がきていることには注意したい。

その際前提となっているのは、外界の対象は存在せず、ただ知識のみがあるということである。⁽³⁵⁾

三性の相互の関係は特に II-17, 23, 28 に的確な記述が見られ、ここではわかれが註(17)で確認したような理解が示されている。

II-29, 30 では依他起性が雑染と清浄との二つに分けられること、つまり二分依他が説かれている。

⁽³⁶⁾
Triṃśikā (Triṃś)

ここでは、第19 偈までは三層からなるとされる知識の分析がアーヤ識を中心になされ、そしてそれ以降の偈頌で、そうした知識にすぎないこの世界に三性がどのように取り込まれるかが説かれる。三性は「三種の本体(tri-vidhaḥ svabhāvaḥ: 23a)」とさ

れている。

(遍)「捉えること」の二つ(grāha-dvayaḥ: 26c)

目の前のものを実体視すること(目の前に何かを立ててつたつてある者)(sthāpayann
agratāḥ kimcit: 27c)

特徴としては本体を欠いた(lakṣaṇanāva niḥsvabhāvah: 24ab)

分別によって事物が構想された状態(分別によって事物が構想される)(vikalpena
vastu vikalpayate: 20ab)

それ(svabhāva)は存在しない(na sa vidyate: 20d)

(依)知識(vijñānam: 26b)

分別(vikalpaḥ: 17b, 21b)

縁から生じる(pratyayōdbhavaḥ: 21b)

独立した存在がない(na svayam-bhāvah: 24c)

意識と呼ばれる知識(mano-nāma vijñānam: 5cd)

構想作用を本質としてもつ(manātmakam: 5d)

知識が変化すること(vijñāna-pariṇāmah: 17a)

(円)表象にすぎないもの(vijñapti-mātratā: 25d, vijñapti-mātratva: 26a)

知識にすぎないもの(vijñāna-mātratva: 28c)

最高の意味(真実)(paramārthah: 25a)

真如(tathatā: 25b)

本体を欠いた状態(niḥsvabhāvātā: 24d)

またVinSgとSNSに見られた三無自性性にも、三性と関連づけて簡単に触れられてい
(39)る。五法への明確な言及は見られない。また三性と清浄・雑染の関係に対する記述もな
い。

Trisvabhāva[⁽⁴⁰⁾nirdeśa] (TriS)

ここでは題名のとおり全体を通して三性説が述べられている。まず第一偈に遍計所執
性、依他起性、円成実性が三性(trayaḥ svabhāvah: 1c)として出てくる。その前提とさ
れているのが「唯心(citta-mātra: 36a)」であるが、最後にはその「心」も否定されてい
く(cittānupalambhatā: 36d)。

(遍)二つの自己(dvayātman: 4b)

顕現したままの[実体視された]それ(yathā khyāti sa: 2b)⁽⁴¹⁾

分別にすぎない存在(kalpanā-mātra-bhāvah: 2d)

顕現したもののそのまま[に実体視すること](yathākhyānam: 3a)

言語表現を自己とするもの(vyavahārātma: 23a)

存在するものとして捉えられている(sattvena grhyate: 11a)

絶対存在しない(atyantābhāvah: 11b)

(幻の)象(hastin: 28a)

(幻の)象のようなもの、二つのもの(hasti-vaḥ, dvayam: 30d)

(依)非存在の分別(asat-kalpaḥ: 4a)

顕現しているそれ(yat khyāty asau: 2a)

縁にもとづいて生じる(pratyayādhina-vrtti: 2c)

顕現する主体(khyātr: 3a)

言語表現する主体からなるもの(vyavahartr-ātmaka: 23b)

誤った存在としては存在するが顕現したもののままには存在しない(vidyate
bhrānti-bhāvena yathākhyānam na vidyate: 12ab)

心(cittam: 5a)

それ(幻の象)の形相(tad-ākrti: 28b)

(幻の)象の形相のようなもの、分別(hasty-ākāra-vaḥ, vikalpaḥ: 30cd)

(円)二つのものない、法性(advaya-dharmatā: 4d)

顕現する主体が顕現したままに[実体視されたものとして]は常に存在していない
状態(khyātur yathākhyānam sadāvīdya-mānatā: 3ab)

異なる状態のない(ananyathātva: 3d)

言語表現が全く滅しているもの(vyavahāra-samuccheda: 23c)

二つではないもの、二つのものの非存在(advayatvam, dvayasvabhāvah: 13ab)

そこ(幻の象の形相)に象が非存在であること(tatra hasty-abhāvah: 28c)

(幻術で用いられる)木片のようなもの、真如(kāṣṭha-vaḥ, tathatā: 30b)

また依他起性は第5～8偈で詳しく分析されている。すなわち、第5偈に見られる「心
(cittam: 5a)」は「原因あるいは結果となるもの(hetu-phata-bhāvah: 6a)」という二つ

に分けられ、「原因となるもの」は「アーラヤと名づけられる知識(ālayākhyā-vijñā-
nam: 6c)」として、「結果となるもの」は「転[識]と名づけられる七種[の知識](pra-
vṛty-ākhyam saptadhā: 6d)」として説明される。さらにこれらのうちアーラヤ識が
「汚れの潜在印象の種子によって積み重ねられている (saṃkleśa-vāsana-bijais cīta-
vam: 7ab)」七識が「種々の形として生じる(citrākāra-pravṛtti: 7d)」と説かれる。
また依他起性は「虚妄分別(abhūta-kalpaḥ: 8a)」として、「異熟した結果に関するもの
(vaipākikaḥ: 8c)」、「因相に関するもの(naimittikaḥ: 8cd)」、「顕現に関するもの
(prātibhāsikaḥ: 8d)」の三種が挙げられ、これらのうち最初のものが「根本識(mūla-vi-
jñānam: 9a)」、後二者が「[七] 転識(pravṛtti-vijñānam: 9c)」に割り当てられている。

このように依他起性に関する記述が多いこと、また三性を出す場合にまず依他起性に